

初釜の日

かなりの雪が降った。テレビも新聞も例年にない積雪だと報道している。今日は初釜の日。

山の面影を残した新興団地のここは気温が低く、風は宙を舞い、雪は直ぐに積もり、溶けるのは遅い。市内から訪れる客は「寒い」と必ず雫し「我が家より三度は低いよ」と付け加え、二度とは来ない、という口ぶりで大袈裟に身を震わせる。私もできるなら外出せず炬燵に丸くなっていたのだ。

この積雪では車は動かせないだろう、行こうか行くまいか迷っていると、市外に住まう心配性の甥っ子から「今日は外出しない方がいいよ。坂はスリップするから」と、メールがあつた。「そうね。今日は初釜だけど、この雪では行かない方がいいだろうね」と返メールをし、「今日は休みます」と初釜会場の係に電話をした。

折り返し「迎えに来る」と電話があつた。「迎えに来てもらうほどなら自分で行く」と、私は答えた。「じゃ、タクシーで来てください」「タクシーもこの坂は登れない。相手の困った様子が見えるようだった。来たことのある人にしか分からないこの立地や気象条件を、まさか同じ市

内でありながらそこだけ車が出せないことはなかつると、高を括るらしい。あまりの熱心さに私も、思い切つて行つてみようか、と用意していた紺色の付け下げを着て雪解けを待ったが、まだチラチラと雪が舞う。雪解けは望めそうにない。やつぱり駄目だと和服からまた普段着に着替えたとき、外から「ワーワー、キャーキャー」騒がしい男女の声が聞こえる。何事だろうと私が窓から外を覗いたと同時に「迎えに来ましたあ。車は坂の下に止めてあります。さあ、行きましょう」とドアを叩き、担いででも連れて行きたい構えで、茶道の仲間が和服の裾を風に乱れさせ、息を弾ませて立つていた。ありがたいなあ、と心に染みて私は脱いだままの和服を急いで風呂敷にまとめ戸外に出た。「ヒヤーツ」と声が洩れる。

「ねっ、寒いでしょう」百も承知の私に初めての客が言う。風と雪と寒に立ち向かって、ただ歩くことだけに労を費やした。坂を下り切り、車が見えた時には「救われた」と本心から思ったものだ。男性が言った。「僕は北海道の自衛隊に居ましたが、あの広野で経験した吹きさらしの風雪を思い出しましたよ。ここはそこに似ています」

雪国の辛苦には比べものにならないが、純白の雪に彩られた自然の厳しさと恐さを爪の先ほど教えられた気がした。初釜の日だった。

(陽)